

「国書基本データベース」の分類語検索－「目録」と「書目」を例として－

山田直子

はじめに

ウェブ上での研究資源の公開が急速に進む中、古典資料の目録作成をめぐる状況もここ数年の間に大きく変化している。2003年6月、国立情報学研究所(NII)の「和漢古書に関する取扱い及び解説」と「コーディングマニュアル(和漢古書に関する抜粋集)」が公表され、2005年8月には、日本目録規則(NCR)の改訂版が刊行された。この『日本目録規則1987年版改訂2版 追加および修正』(日本図書館協会目録委員会編)では「第2章 図書」が和古書・漢籍にも適用できるよう増補され、写本や手稿等を扱う「第3章 書写資料」も増補改訂された。

書誌学研究成果をふまえて目録規則が標準化されることによって、協同分担入力方式による古典資料の書誌記述と目録データの作成が可能となりつつある。その目指すところは、ネットワーク環境をベースに書誌調査と目録化を行い、和漢古典籍の総合目録データベースを構築することである。

前近代の和書に関しては、『国書総目録』『古典籍総合目録』(岩波書店刊)が電子化され「国書基本データベース(著作編)」と「古典籍総合目録データベース」として公開されている。437,000件の著作を収録する「国書基本データベース」は、分散型の協同分担入力によって古典資料の書誌記述を行う際、参照すべき必須のツールである。

本稿では、この「国書基本データベース」の利用法について、分類語による検索の問題を中心に考察する。ネットワーク情報資源の組織化と検索は密接に関連しているので、目録データの作成とデータベース検索という二つの問題をあわせて考えたい。

分類語の事例分析

『国書総目録』には採集した目録資料をもとに「類」という記号で「類別」(分類)が与えられている。著作のおおよその内容を示すために付された「類別」であり、特定の分類表に基づいて体系的に付与されたものではないが、電子化された「国書基本データベース」では、分類項目が主題検索のキーとして重要な役割を果たしている。

本稿ではこの分類語を用いた検索について「目録」と「書目」を事例として取り上げ分析する。書誌学用語であり図書館用語でもある「目録」「書目」という語は、現在よく似た意味で使われるが、分類語としてはどう区別されているのだろうか。

「目録」「書目」の語義について『図書館用語集』(三訂版 日本図書館協会 2003)では次のように説明されている。

目録 catalog 一般にある種の物品を、簡潔に表現してリスト化したもの(カタログ)をいい、図書館では図書目録ないし資料目録の略称として用いられる。

書目 bibliography, book list 書物の目録の意味で、一般に文献目録、図書のリストを指している。

ただし古典籍を扱う場合には注意が必要である。前近代の和書では、本の目次を目録と称

しているからである。

『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店 1999）の「目録」の項には「目・目次と同じ。内容を表示した記載を書き並べたもの。」とあり、書籍目録に関する詳しい解説は「目録」ではなく「書目」の項に記されている。この辞典の「分野別項目一覧」を見ると「目録」は【題跋等】という本の内容を表す項目に分類されており、「書目」が【解題・目録】の下位概念とされているのである。

このような語義をふまえ「国書基本データベース」を検索してみると、次のような数値が出る（2006年1月25日現在）。書名の中に「目録」という語が含まれるデータは5163件。これに対し、書名の中に「書目」の語が含まれるデータは1239件である。両者の文字列が重なる「書目録」を書名中に持つデータは678件にのぼる。そこでより限定するため、後方一致検索によって書名が「～書目」となる例を探すと、437件である。

和古書の場合、書名には「書目」よりも「目録」の語のほうが圧倒的に多く使われているが、同じことばを用いてデータベースの分類項目を検索すると数値は逆転する。分類が「目録」とされているデータは611件であるのに対し、分類が「書目」のデータは1978件である。両者はどのような基準によって区別されているのだろうか。

「書目」は書籍のリストであり、品物、物品のリストが「目録」であるとおよそは区分できる。書名から判断することが可能な例をいくつか挙げると、「目録」に入るのは「伊藤家蔵品目録」「稲田文笠展観録」「上杉家什宝目録」「奥平家道具帳」「御軸物目録」などである。宝物、什物、古物、拝領物、武具なども含まれるが、御什書となると判断に迷う。御書物帳などはどう扱えば良いだろうか。絵巻物、書画、遺墨、文書なども「目録」に分類されているが、書籍とそうでないものと、どこに線を引くのか難しいところである。

分類が「目録」のデータ例	WORK[975177]
	【書名】弘采録目録 K 1
WORK[950469]	【巻冊】二冊
【書名】幸阿弥系図並同蒔絵品目 K 1	【分類】目録
【巻冊】二巻一冊	【著者】池田／玄斎
【分類】系譜 目録	
	WORK[975462]
WORK[950925]	【書名】肯山公治家記録目録 K 1
【書名】香雲堂叢書 K 1	【巻冊】二編五冊
【巻冊】二冊	【分類】目録
【分類】俳諧 目録	
【著者】阿誰軒[井筒屋／庄兵衛]	WORK[978483]
	【書名】公私用筆筒目録 K 1
WORK[956672]	【巻冊】一冊
【書名】皇国名医伝目次 K 1	【分類】目録
【分類】目録	【著者】石黒／信由
【著者】岡本／況斎	【成立】天保三

WORK[2440906]

【書名】神野御道具帳 N 0

【分類】目録

【著者】佐賀藩編

WORK[1105324]

【書名】古今要覧稿目録 K 1

【分類】目録

WORK[2615670]

【書名】高麗流八条家目録 N 0

【分類】目録

【著者】吉田／武平次

WORK[1105335]

【書名】古今要覧調進目録 K 1

【巻冊】一冊

【分類】目録

【著者】屋代／弘賢

【著作注記】(般) 文政四 - 天保一三。

WORK[958907]

【書名】古絵目録 K 1

【巻冊】一冊

【分類】絵画 目録

「目録」と分類されたデータの中には、和古書特有の用法である「目次」を意味する例も入っている。「大日本史標目」「俊頼口伝集目次捷見」「兵範記要目」などである。これらを「目録」と呼ぶことは、本来の語義、古典籍書誌学の用語としては適切と言えるだろうが、一般の利用者には解説が必要である。「目次」の語が書名に使われている例が 69 件あるので、「目次」を分類語に採用することなども考えてよいかもしれない。

検討すべき事柄としては、文書目録の扱いが挙げられる。「国書基本データベース」の具体例を見ると、タイトルに「古文書目録」とあるデータが 21 件、このうち分類が「目録」となっているものが 16 件、「書目」が 3 件なので、「目録」に統一してよいと思われる。そのように基準を定めれば、現在、分類が「書目」となっている「香取古文書目録」「東大寺古文書目録」「美濃国古文書目録」と、分類が付与されていない「秋田藩諸家古文書目録」「大湊古文書目録」のデータを修正し、「目録」という分類を付与してよいことになるだろう。

このように見てくると、分類が「目録」であるのに書籍のみのリストである場合は、分類項目を「書目」に変更したほうがよいと言える。具体例を挙げると、書肆の出版目録である「嵩山房和書目録」、蔵書目である「楓山文庫目録」などの分類が「目録」となっている。どちらも『国書総目録』の項目かどうかを示す記号が「N」の新規に作成されたデータであり、もとになっているのは、早稲田大学図書館の服部文庫目録である。服部南郭を初代とする文庫の刊行された目録の分類は「服部家旧蔵一般書 — 総類 — 書誌・書目」であり、「書目」の中にこの「嵩山房和書目録」と「楓山文庫目録」が掲出されている。したがって分類は「書目」とすべきであり、データベース全体の整合性を高めるという意味でも、分類語を「書目」に付けかえた方がよいと思われる。

データ修正のプロセス

書籍のリストは「書目」、書籍以外の物品のリストは「目録」に分類すると仮に基準を定めた場合、この基準からはみ出す例を見つけ出し修正するプロセスは、どのようなもの

になるだろうか。数千件のデータを点検する前段階として、典型例をはじき出し問題を明らかにしながら修正の方針を決めていく必要がある。そこで以下、そのプロセスを具体的に考えてみたい。

例えば「文書」「古文書」を別扱いとしたうえで、書籍のリストらしいと見当がつくものを抜き出してみる。検索条件としては著作名を「書目録」とし、「文書」を除くと指定する。分類項目は「目録」である。このように絞り込むと次の20件が抽出される。

- | | |
|---|---|
| 1 WORK[4311324]
【書名】馬書目録 Y 0
【分類】馬術 目録 | 【分類】目録 |
| 2 WORK[2615341]
【書名】江戸書林蔵版書目録 N 0
【分類】目録 | 9 WORK[1315259]
【書名】崇禎類書目録 K 1
【卷冊】一冊
【分類】目録 |
| 3 WORK[555635]
【書名】海辺叢書目録 K 1
【卷冊】一冊
【分類】目録 | 1 0 WORK[3573066]
【書名】徂徠先生蔵書目録 N 0
【分類】目録 |
| 4 WORK[555679]
【書名】嘉永慶応風説書目録 K 1
【卷冊】一冊
【分類】目録 | 1 1 WORK[3360143]
【書名】武田流弓書目録 K 1
【卷冊】一冊
【分類】弓術 目録 |
| 5 WORK[1169240]
【書名】三州刈谷土井家蔵書目録
【卷冊】一冊
【分類】目録 | 1 2 WORK[1434168]
【書名】椿亭叢書目録 K 1
【分類】目録 |
| 6 WORK[4310489]
【書名】諸物製造書目録 N 0
【分類】目録 | 1 3 WORK[4364827]
【書名】唐樹園蔵書目録 N 0
【分類】目録 |
| 7 WORK[1285105]
【書名】信使記録下書目録 K 1
【分類】目録 | 1 4 WORK[1544394]
【書名】女房奉書目録 K 1
【卷冊】一冊
【分類】目録 |
| 8 WORK[3572916]
【書名】嵩山房和書目録 N 0 | 1 5 WORK[1546890]
【書名】拔書目録 K 1
【卷冊】一冊
【分類】目録 |

- | | |
|-------------------|---------------------|
| | 【分類】 目録 |
| 1 6 WORK[4311460] | |
| 【書名】 馬術書選書目録 N 0 | |
| 【分類】 馬術 目録 | |
| 1 7 WORK[1674915] | |
| 【書名】 武辺叢書目録 K 1 | |
| 【分類】 目録 | |
| 1 8 WORK[2974063] | |
| 【書名】 宝石類書目録 N 0 | |
| | 1 9 WORK[1720929] |
| | 【書名】 松岡叢書目録 K 1 |
| | 【巻冊】 一冊 |
| | 【分類】 目録 |
| | 2 0 WORK[4315939] |
| | 【書名】 水戸先哲著書目録 N 0 |
| | 【分類】 目録 |
| | 【著者】 津田／信存〔津田／東巖〕校閲 |

3, 1 2, 1 7の「叢書目録」は、叢書に含まれる作品名のリストであるから「書目」としてよいだろうか。叢書全編の内容細目を記した目次(=目録)とも言えるので判断に迷うところである。そこで、書名が「叢書目録」となっているデータを検索すると、22件、うち16件が「書目」で、4件が「目録」、分類のないものが2件であった。この結果から「叢書目録」は「書目」に統一したほうがよいということであれば修正する。

2「江戸書林蔵版書目録」は新規に作成された著作で、国文学研究資料館所蔵本に基づくデータである。もともなった『和古書目録』に、須原屋茂兵衛他6書肆蔵版目録の合冊と注記があるので、出版目録として8「嵩山房和書目録」と同じく「書目」に修正する。5, 1 0, 1 3の蔵書目録も同様に「書目」のほうがよいだろう。

1「馬書目録」、1 1「武田流弓書目録」、1 6「馬術書選書目録」等、ある主題に限定された書籍リストは「馬術 目録」「弓術 目録」のように主題分野と形式とを組み合わせた形になっていることが注意される。これにならえば6「諸物製造書目録」にも蘭学、洋学などと学問領域を加えることができるかもしれない。

以上、分類が「目録」である「国書基本データベース」の事例から典型例を抽出・分析し、問題点を指摘した。「国書基本データベース」の分類語は「弓術 目録」のように複数付与することが可能な「件名」に近い性格を持っている。そこで、件名検索というデータベースの利用法とも比較しながら、分類語の活用についてさらに考察をすすめたい。

件名標目との比較

「件名」は著作の主題をあらわす「subject heading」にあたる図書館用語である。主題検索に用いられる統制語で「件名標目」ともいい、目録データには「件名標目表」の中から適切なことばが選ばれ付与される。国内で広く使われている件名標目表には「国立国会図書館件名標目表(NDL SH)」と『基本件名標目表(BSH)』(第4版 日本図書館協会 1999)とがある。

国立国会図書館の件名標目表は、1991年の第5版以降刊行されなかったが、改訂作業をへて「国立国会図書館件名標目表 2004年度版」がホームページ上に公開されている。国会図書館NDL-OPACの件名検索画面から「普通件名一覧」で「目録」の語をひくと、「目録 → 書目」と指示される。そこで「書目」を参照すると次のように表示される。

書目

書目 -- 18世紀以前

書目 -- 解題

書目 -- 検索 → 文献調査

書目 -- 出版 → 出版目録

書目(書籍商)

書目 -- 書籍商 → 書目(書籍商)

書目 -- 書目 → 書誌の書誌

書目 -- 図書館 → 蔵書目録

この中から古典と現代に共通する件名である「書目 -- 解題」について『国書総目録』に収載される「異朝書籍考」とその活字翻刻本という具体例を挙げて検討したい。

【書名】異朝書籍考

【巻冊】一冊

【分類】書目

【写本】内閣文庫 【活字翻刻】漢書解題集成一

『漢書解題集成』を NACSIS Webcat で調べると、データは以下のとおりである。

漢書解題集成 / 佐村八郎編<カンジョ カイダイ シュウセイ>. -- (BN14630589)

東京 : ゆまに書房, 1996.6

1冊 ; 22cm. -- (書誌書目シリーズ ; 41 . 和漢名著解題選 ; 1)

NOTE: 初版: 六合館 明治 33 ~ 34 年刊 ; 復刻

ISBN: 4897140382

VT: 漢書解題集成 一~三

AL: 佐村, 八郎<サムラ, ハチロウ>

CLS: NDC8 : 028 ; NDLC : UG2 ; NDLC : UG47

SH: 図書解題 ; 書目 -- 解題

SH (subject heading) の項に「図書解題」とあるのは「基本件名標目表 (BSH)」の件名で、「書目 -- 解題」が国会図書館 NDL SH の件名である。『漢書解題集成』は「書誌書目シリーズ」「和漢名著解題選」の1冊として復刻されているが、このシリーズ名から見て取れるように、「異朝書籍考」は書誌・書目であり、解題とも言われているのである。

次に、やはり古典と現代に共通する語として「蔵書目録」について比較したい。国会図書館の件名標目表には「日本十進分類法 NDC 新訂 9 版」に対応した分類記号順排列表が付されているので、それによって「蔵書目録」を見ると、SN (Scope Note) として、図書館等の所蔵資料目録のみに使用するという限定注記がある。

029 蔵書目録

UF 「を見よ」 : 書目-図書館 ; 図書目録(図書館)

NT 「をも見よ」(下位語) : オンライン目録

SN (Scope Note) : 図書館等の所蔵する資料の目録に限定して使用. ;

図書館等の所蔵資料に限定されない文献目録、図書のリストには「書目」を使用。

「国書基本データベース」の「書目」に分類された 1978 件のデータから、蔵書の目録を選び、より細分化された分類語として「蔵書目録」を付与するという考え方もある。しかし現代の図書館用語では、所在が明らかである所蔵資料リストを「蔵書目録」と呼び、それ以外のリストと区別しているのである。かつて存在した家の蔵書や学者の蔵書にはやはり「書目」を用いるのがよいのではないだろうか。

蔵書目録の扱いについて『改訂内閣文庫国書分類目録』を見ると、内閣文庫の分類表では「総記」の「1 図書」の中が「書誌学」「一般書目」「蔵書目」「雑著」に分かれている。「蔵書目」という語ならば現代の「蔵書目録」との違いを示すことができるだろう。

内閣文庫の「一般書目」の項には「異朝書籍考」が林鷲峰「日本書籍考」に並んで掲出されているが、こうした解題目録と、より詳しい書誌学の論考とを分けることもなかなか難しい。内閣文庫の「書誌学」に相当する項目として「国書基本データベース」には「書誌」という分類語があるが、「書誌」は図書館用語でもあり、国会図書館 NDL - OPAC の件名でも「書誌の書誌」などと使われている。この語もまた、注意深く定義しなければならないのである。

おわりに

以上、「国書基本データベース」を分類語によって検索する際の問題点を「目録」と「書目」を事例として取り上げ考察した。従来、コレクションごとに蔵書構成の特徴に合わせて分類・編成されてきた古典籍目録が、ウェブ上に蓄積され総合目録データベースの中に位置付けられた時、その分類体系はどのように維持されるのだろうか。日常用語と専門用語が交錯し、時代や研究領域によって概念が異なることも多い分類語について、「国書基本データベース」の用例を分析し、用法のガイダンスを作成しつつ、データの整合性を高めていくことが望まれる。

参考文献

相田満「和漢古典学のオントロジの資源化のためにー『国書総目録』の分類についてー」

(『和漢古典学のオントロジ2』2005年3月)

谷本玲大「『国書基本データベース』の標題文字列」(『標題文芸3』2005年3月)

『継続資料と和古書・漢籍の組織化 日本目録規則 (NCR) 1987年版改訂2版第13章および第2・3章の改訂』日本図書館協会目録委員会編 2005年6月

『件名標目の現状と将来ーネットワーク環境における主題アクセスー 第5回書誌調整連絡会議記録集』国立国会図書館書誌部編 日本図書館協会 2005年7月